

高鍋町（たかなべまち）に転封され、秋月での歴史に幕をおろしました。この縁から、高鍋町と本市は姉妹都市協定を結んでいます。

秋月種実は、領内でのキリスト教布教に対し

寛容でした。宣教師であるガスパル・ヴィレラを当時の足利将軍のもとへ案内したダミアンも、秋月の出身です。秋月氏の転封以降、秋月は小早川氏の領地となります。その後は黒田氏の領地となり、黒田如水（官兵衛）の弟である黒田直之（なおゆき）が治めました。直之は熱心なキリストとして知られ、秋月城跡から出土した罪票付の十字文軒丸瓦は直之に関連するものと考えられています。



秋月や上秋月には教会がつくられ、最盛期のキリストンは数千人規模に及んだといいます。

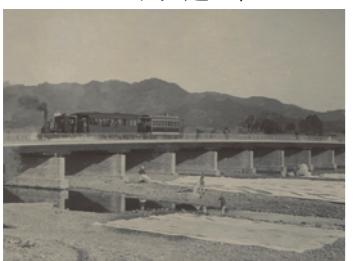
室町時代初頭には、黒川と佐田の山間部に彦山の座主（僧侶のトップ）の居館・黒川院が構えられます。元弘三・正慶二（一三三三）年に後伏見天皇の第六皇子・長助法親王（ながすけのじゆうおう）が座主となり、翌年に黒川院を造営、豊前の宇都宮氏の娘を妻に迎えました。以降、世襲制で二五〇年にわたって山岳修験の宗教都市として繁栄しました。発掘調査では、礎石をもつ建物跡や外国製

方春朔は、日本で初めて種痘（しゅとう）の方法を確立した人物として知られます。春朔は『種痘必順弁』を著し、多くの弟子に種痘法を伝授して全国の医学の発展に貢献しました。春朔が天野甚左衛門（あまのじんざえもん）の子どもたちに種痘を実施した二月一四日は、現在、予防接種記念日となっています。

長興から始まつた秋月藩は一二代長徳（ながのり）まで続いた。現在、秋月は「秋月伝統的建造物群保存地区」として国の選定をうけ、地域の人々の協力によって町並みが守られています。

江戸時代、甘木は博多や姪浜に次いで人口が多く、秋月街道・日田往還の要衝であったことから人馬の往来も盛んな町でした。人やモノが行き交う中で様々な産業が発展し、甘木絞りや幟旗などの染色工芸品の生産や、飴・砂糖の生産が盛んに行われ、特産品として広く流通しました。経済的・政治的に重要な甘木は、福岡本藩が治めました。

三奈木は、福岡藩の大老・黒田一成（かずなり）を初代とする三奈木黒田家が治めました。一成は有岡城で黒田如水を助けた加藤重徳（しげのり）の息子で、この縁から黒田の姓を賜り、長政と兄弟のように育てられました。領内には別邸（御茶屋）が建てられ、鵜飼（うかい）見物に来た福岡藩主が滞在したことありました。現在は、旧三奈木黒田家庭園として、市指定名勝になっています。



近代（明治～昭和時代）

明治四（一八七二）年七月、廢藩置県により秋月藩は秋月県となり、四ヶ月後の一月には福岡県に統合されました。家臣たちは、家禄を失い、仕えるべき藩主も失い、士族と呼ばれるようになります。九州の一部士族の中に、明治政府の政策に反発する動きが生まれ、秋月でも明治九（一八七六）年に旧秋月藩士の宮崎車之助や今村百八郎らを中心に秋月の乱が勃発しますが、豊津藩士との決起が失敗し鎮圧されます。明治一〇（一八七七）年の西南戦争で明治政府が勝利し、以降は明治政府によって近代化が進められました。

明治～大正時代にかけて朝倉軌道や西筑軌道、三井電気軌道などが開設され、人々の往来はより活性化します。朝倉軌道は、現在の三八六号線とほとんど同じルートにあり、最終的に二日市から杷木まで延長しました。田丸（とうまる）橋を繋ぐ軌道は西筑軌道と言い、現在もその橋脚の一部が残っています。昭和一四年には国鉄甘木線（現在の甘木鉄道）が開通、朝倉軌道は廃線となり、三井電気軌道は西鉄電車と合併しました。また、明治一〇年代になると寄合の場と

して公会堂が設立されるようになり、比良松に本市初の公会堂・舒翠館（じょすいかん）が建てられました。甘木の希声館（きせいかん）は明治二二年の設立で、勝海舟が揮毫したと伝わる「希声館」の扁額が残されています。

大正八（一九一九）年には、現在の三井郡大刀洗町・朝倉郡筑前町・朝倉市にまたがる飛行場、大刀洗陸軍飛行場が建設されます。以降、軍関係施設の建設が進み、昭和初期には東洋一の飛行場と言われました。激化する戦争の中で、大刀洗飛行場に襲来した米軍機の爆撃により、頓田の森に避難していた立石国民学校の児童三一名が亡くなりました。この出来事は「頓田の森の悲劇」として、今に語り継がれています。

戦後、バスの運行が始まつたことで、甘木・朝倉・杷木の各町ではバスセンターを中心に銀行や商店、映画館などができ賑わいました。甘木では、門前町を基礎とした商店街がアーケード付の商店街に発展し、夜市も開かれました。



朝倉市ホームページ
あさくらの歴史

の陶磁器類が発見され、山中でも大型の建物がたち、海外の希少な交易品を手に入れられる財力を有していたことがわかつています。

近世（江戸時代）

関ヶ原の戦いの功績により、黒田長政（ながまさ）は筑前国を与えられ、福岡藩を立藩します。また、不仲であった豊前の細川氏を警戒し筑前六端城を築き、杷木志波の麻氏良城（あさのよしらわき）は、父・黒田如水からの重臣である栗山利安（くりやまとしやす）に預けました。栗山利安は黒田如水の没後、その菩提を弔うため杷木志波に円清寺を建立しました。



元和九（一六二三）年、黒田長政の三男・黒田長興（ながおき）は夜須・下座・嘉麻（かま）三郡のうち五万石を与えられ、福岡藩の支藩として秋月藩が成立します。長興は現在の秋月中学校に表御殿（役所）を、梅園（うめぞの）に奥御殿（藩主の邸宅）を構え、堀や石垣を設けて陣屋形式の城郭を造ります。表御殿の本門（黒門）に通じる坂は瓦坂と呼ばれ、土砂の流失を防ぐために瓦を縦に突き刺して並べていることからその名がつきました。黒門は明治時代に藩祖・後伏見天皇の第六皇子・長助法親王（ながすけのじゆうおう）が座主となり、翌年に黒川院を造営、豊前の宇都宮氏の娘を妻に迎えました。以降、世襲制で二五〇年にわたって山岳修験の宗教都市として繁栄しました。発掘調査では、礎石をもつ建物跡や外国製

土砂の流失を防ぐため瓦を縦に突き刺して並べていることからその名がつきました。黒門は明治時代に藩祖・後伏見天皇の第六皇子・長助法親王（ながすけのじゆうおう）が座主となり、翌年に黒川院を造営、豊前の宇都宮氏の娘を妻に迎えました。以降、世襲制で二五〇年にわたって山岳修験の宗教都市として繁栄しました。発掘調査では、礎石をもつ建物跡や外国製

中興の祖と称されています。藩財政回復のため、特產品（元結・寿泉苔・葛粉など）の開発を奨励し、七代藩主黒田長堅（ながかた）が学問所として設けた「稽古亭（けいこてい）」（後に稽古館）を藩校として発展させた。藩内の産業や学問・文化の発展に努めました。秋月の目鏡橋（めがねばし）が長舒（ながのぶ）の時代に着工したものの、秋月藩が長舒の時代に着工したもので、秋月藩が長舒警備に就いた際、長舒が国を与えられ、福岡藩を立藩します。また、不仲であった豊前の細川氏を警戒し筑前六端城を築き、杷木志波の麻氏良城（あさのよしらわき）は、父・黒田如水からの重臣である栗山利安（くりやまとしやす）に預けました。栗山利安は黒田如水の没後、その菩提を弔うため杷木志波に円清寺を建立しました。

